

陸の水

==== No.81 =====

日本陸水学会東海支部会
 ニュースレター（2018年12月27日）
 発行：日本陸水学会東海支部会
 連絡先：〒501-6021 岐阜県各務原市
 川島笠田町官有地無番地
 国立研究開発法人土木研究所
 自然共生研究センター
 末吉 正尚
 Tel:0586-89-6036、Fax:0586-89-6039
 E-mail: m-sueyoshi55@pwri.go.jp

目次

- 2018年度「第15回サマースクール」の報告 (p. 1～5)
- 第32回東海陸水談話会の報告 (p. 5～7)
- 応用生態工学会第22回東京大会の報告 (p. 7～9)
- 第33回東海陸水談話会の案内 (p. 9)
- 2018年度「第22回総会・第21回研究発表会」の案内 (p. 10～13)
- 2019年度「研究助成」の募集案内 (p. 14)
- 会費納入のお知らせ (p. 15)
- 編集後記 (p. 15)

2018年度「第15回サマースクール」の報告

「2018年陸水学会東海支部会サマースクールに参加して」

株式会社水地盤研究所 新実智嗣

日時：2018年8月25日（土）～26日（日）

場所：静岡県浜松市天竜区 阿多古川周辺

今年も8月25日、26日と毎年恒例の陸水学会東海支部会サマースクールに参加してきました。今回は静岡県浜松市天竜区の阿多古川周辺となります。静岡大学天竜フィールド上阿多古を拠点に天竜川周辺の自然を満喫することが、今回のサマースクールの目的となります。

【1日目①】川遊び

まずは近くの西阿多古川で川遊びです。

あいにく前日からの雨で増水しており、いつもよりも水位が高く少し濁り気味な流況でしたが、それでも街でみる都市河川とは比較にならないほど綺麗なところでした。

内田先生からタモ網の使い方を教わり、さっそく魚とりを始めます。みんなそれぞれ思うところに散らばってあちこちで石をひっくり返しては、タモ網ですくい取り、中を確認していきます。

10分もすれば、あちこちで「なんか捕れた！」



写真-1 タモ網の講習

の声があがります。獲物を水槽に入れて、内田先生に鑑定してもらいます。



写真-2 みんなで魚とり



写真-3 鑑定中

サワガニ、ヨシノボリ、トビケラ、カジカなど普段目にすることのないような生き物たちがたくさんいました。それぞれの生き物の形に特徴があって生息場所に適応しているのには驚きです。面白いものをみることができました。

【1日目②】ヘボ追い

ひとしきり川で遊んだあとは、今度は「ヘボ追い」になります。「ヘボ追い」ってなに？という感じですが、ハチの幼虫のことだそうです。これをたくさん捕まえて食べるとのこと。詳しい話は、昆虫食倶楽部の夏目さんからお聞きしました。

まずは、ハチがいそうな場所にイカの切り身を吊るしておきます。しばらくするとハチがやってきて切り身をほぐして巣に持って帰るそうです。その場所と巣を何度も往復するので、ハチにうまくコヨリをつけて、それを目印にハチを追いかけて巣を特定します。



写真-4 ヘボ追いの説明



写真-5 イカの切り身

言うのは簡単なのですが、いざ実際やってみようとするとても大変なことがわかりました。そもそもハチがどのあたりにいるかなどわかりもしません。

しかし、名人レベルになるとこの辺にいそうだな、と当たりをつけてあっというまにハチにコヨリを持たせて巣を特定していくそうです。まさに神業です。残念ながら今回はハチの巣を見つけるどころか、ハチすら遭遇することはできませんでした。それでもなんとなく雰囲気は理解できたつもりです。



写真-6 ヘボ追いの説明



写真-7 クロスズメバチの標本

【1日目③】バーベキューと談話会

ヘボ追いから戻ってからは、バーベキューの始まりです。各自役割を分担して効率よく準備をしていきます。

お腹いっぱいになったあとは、飯尾先生、矢沢専門職員に近年の森林環境の状況や天竜フィールドの紹介などを聞きながら、そのまま懇親会となりました。

中学生、大学生、社会人、年金で暮らす方など年齢ゴチャまぜ状態の懇親会は楽しいものでした。



写真-8 アカミミガメの甲羅で楽器



写真-9 バーベキューの様子



写真-10 談話会の様子

【2日目】鍾乳洞（竜ヶ岩洞）

2日目は朝ごはんを食べて、竜ヶ岩洞に向けて出発です。

竜ヶ岩洞は2人の洞窟愛好家により開拓された鍾乳洞で総延長 1,000m という大鍾乳洞です。洞内の気温は年間を通して 18℃、夏なのに寒いです。中に入るといたるところに鍾乳洞の自然のモニュメントがみられます。それぞれに名前がつけられており、面白いです。

中でも圧巻は「黄金の大滝」です。地下深くに大きな空間がありそこに大量の地下水がしぶきをあげて落ちています。凄い一言です。

鍾乳洞は結晶質石灰岩が炭酸を含む地下水に溶かされて形成されるそうです。100年にわずか 1cm の成長、これを何万年もかけて竜ヶ岩洞はできました。自然の造形美には感心させられるばかりです。

サマースクールの最後は、竜ヶ岩洞名物のジェラートをみんなで頂いて締めくくりとなりました。



写真-11 竜ヶ岩洞入口



写真-12 竜ヶ岩洞の様子 1



写真-13 竜ヶ岩洞の様子 2



写真-14 鍾乳洞のでき方



写真-15 ご満悦のジェラード女子

2日間の短い期間でしたが、川遊びあり、ヘボ追いあり、バーベキューあり、鍾乳洞ありと充実した内容でした。

身近な地域にこれだけ多様な環境が存在するのは凄いことなのではないかと改めて思い直したサマースクールとなりました。

参加していただいた皆様、本当にありがとうございました。



写真-16 集合写真

第 32 回東海陸水談話会の報告

「付着藻類の管理を目的とした川底への土砂供給」

日時：2018年10月3日 18時～20時

場所：名古屋大学減災館減災ホール

講演者：国立研究開発法人土木研究所自然共生研究センター 主任研究員 宮川幸雄

今回の談話会では、付着藻類をテーマとして、演者が自然共生研究センターに勤務してから現在までに取り組んできた研究を紹介しました。この発表では、大学関係者のほか、環境分野のコンサルタント会社の方および行政の方も、聴講に来てくださいました。また、今年度は自然共生研究センターが開所されてからちょうど20周年となるため、本題の前に後日行われた記念シンポジウムも宣伝しました。

ダム下流への土砂供給による付着藻類への効果

はじめに、本テーマの背景として、ダム下流への土砂供給による付着藻類への効果について説明しました。ダムにより下流への土砂移動が寸断された場合、土砂供給量が少なくなるため、下流の川底では細かな土粒子（砂や砂利）がなくなっていきます。粗い粒子（石や礫）のみでは、川底は安定しますが、石に付着する藻類（付着藻類）が砂の移動・衝突で剥離される機会が減少するため、大型糸状藻類が定着しやすく、過剰に繁茂するおそれがあります。現在、全国のダムにて、堆積した土砂を人工的に下流に供給する事業が進められており、貯水池の容量の回復させる効果のほか、ダム下流の付着藻類の剥離・更新を促す効果も期待されています。

砂や砂利の供給による付着藻類への効果には、主に2種類あると考えられます。一つは、供給された土砂の移動・衝突による付着藻類の剥離（クレンジング効果）、もう一つは、供給された土砂の堆積による石の露出面積、すなわち付着藻類の生育面積の減少です。前者は、水路実験や現地調査を伴う研究がこれまでに数多く実施され、土砂の移動量に対する付着藻類の剥離量を試算した研究もありますが^{1),2)}、後者は土砂の堆積量と石の露出面積との関係が解明されておらず、研究事例が少ないのが現状です。



写真-1 講演の様子

付着藻類の生育面積の減少も考慮した土砂供給の効果の評価手法の提案

次に、上の背景を踏まえて、演者が博士課程で取り組んだ内容を紹介しました。博士課程では、土砂供給による付着藻類への効果をより精緻に解明することを目的に、土砂の堆積量と石の露出面積との関係を数値化して、付着藻類の生育面積も加味した1m²あたりの現存量を予測するモデルを開発し、ダム下流の現場に適用する研究に取り組みました。

予測方法の開発にあたっては、自然共生研究センターの実験河川を用いて、予め粒径を計測した石を砂で埋没させ、流水によって砂が流出する過程における、砂面高（埋没前は0mと設定）、石の露出面積、および付着藻類現存量の変化を数日おきに観測しました。この実験により、砂面高が概ね石の平均高さの約0.5倍以上から石の露出面積（付着藻類の生育面積）が急速に減少し、約1.5倍で概ね0m²になるという結果が得られました。また、付着藻類の増加速度は、砂や砂利が移動しはじめ、剥離が開始される段階において高くなるという結果も得られました。これは、付着藻類が砂や砂利で剥離された直後は、剥離前よりも高い成長速度を有するためと考えられます³⁾。

そして、開発した予測モデルを現場のダムに適用した事例について紹介しました。具体的な内容は、埼玉県の一瀬ダムを対象として、年間の堆砂量（推定値）をもとに供給土砂量を複数パターン（年間堆砂量の約0～30%）設定し、供給しなかった場合の付着藻類現存量と比較するというものです。その結果、供給から約1ヶ月後の時点において、年間堆砂量の約30%の土砂が供給された場合に、供給されなかった場合と比べて付着藻類現存量が有意に少なくなりました。

石礫の露出高を簡易に予測する手法の開発

最後に、今年度の研究として、石礫の露出高を簡易に予測する手法について紹介しました。これは、上記の付着藻類現存量の予測モデルで用いられる石礫の露出高は、現場でどのように測ればよいのか？という課題を受け、現場技術者向けに簡易に予測することを目的として開発した手法です。現場で露出高を測定するには、潜水目視が必要で、測定に時間がかかるといった課題があります。

具体的には、河床粒径分布等の一般的なデータを用いて、石礫の露出高の平均値、度数分布（ヒストグラム）を算出する手法です。現場の観測値と比較して精度を確認した結果、平均値のあたりはあまりよく、度数分布も概ねあたりはまる結果となりましたが、度数分布については一部分で乖離も見られました。今後はモデルをより多くの箇所に適用する等により、精度を高め

ていきたいと考えています。

まとめ

今回紹介した一連のモデルは開発されたばかりのもので、その適用条件を明らかにする必要がある等、取り組むべき課題は多く残っております。これに対し、今後増加していくと思われるダム下流への土砂供給事業を対象に、調査、研究事例を積み上げていくことで、ダム下流における付着藻類の管理に貢献できるような成果に発展させていきたいと考えております。

【参考文献】

- 1) 北村忠紀, 加藤万貴, 田代喬, 辻本哲郎: 砂利投入による付着藻類カワシオグサの剥離除去に関する実験的研究, *河川技術に関する論文集*, 6, 125-130, 2000.
- 2) 田代喬, 渡邊慎多郎, 辻本哲郎: 掃流砂礫による付着藻類の剥離効果算定に基づいた河床攪乱作用の評価について, *水工学論文集*, 47, 1063-1068, 2003.
- 3) Hill W.R., Boston H.L.: Community development alters photosynthesis-irradiance relations in stream periphyton, *Limnology and Oceanography*, 36(7), 1375-1389, 1991.



写真-2 講演後の懇親会にて

応用生態工学会第 22 回東京大会の報告

東海支部会研究グループ「御嶽調査研究」

愛知工業大学工学研究科 宇佐見亜希子

日時：2018 年 9 月 21 日（金）～23 日（日）

場所：東京工業大学

応用生態工学会第 22 回大会が、2018 年 9 月 21 日(金)～23 日(日)の日程で開催されました。その中で、21 日(金)14:00～16:00 に、田代喬会員（名古屋大学）、松本嘉孝会員（豊田高専）が企画した自由集会「御嶽山麓に見られる強酸性水、崩壊地形、火山噴出物と生物の営み」が行われました。そして、2014 年 9 月に噴火した御嶽山の山麓地域を対象とした東海支部会員による共同研究の成果を発表しました。



写真-1 松本会員による趣旨説明

はじめに、松本会員から自由集会の趣旨説明がありました。研究対象地域での御嶽山の噴火や地滑りの自然災害・復旧活動の歴史、1910 年代から開始された国内における無機酸性水質および生物相の研究事例の紹介の後、当支部会研究グループ「御嶽調査研究」のプロジェクト内容が紹介されました。続いて、会員らによる以下の 5 題の話題提供があり、火山地域での自然災害（強酸性水、山体崩壊、火山噴出物）の影響を受けた河川の水質および生物相の現状が発表されました。

1. 「御嶽山麓水系の水質特性、特に主要イオン濃度の分布」 松本嘉孝
2. 「御嶽山麓水系の水質特性、特に微量元素の分布」 宇佐見亜希子（愛知工業大学）
3. 「強酸性を呈する河川水系に形成された付着藻群落とその一次生産」 野崎健太郎（椋山女学園大学）
4. 「火山活動と水生昆虫群集：2014年噴火後の回復過程」 田代喬
5. 「火山活動に関する強酸性水および崩壊地形に規定されるイワナの分布」 小野田幸生（土木研究所）



図1 発表スライド（松本）



図2 発表スライド（宇佐見）

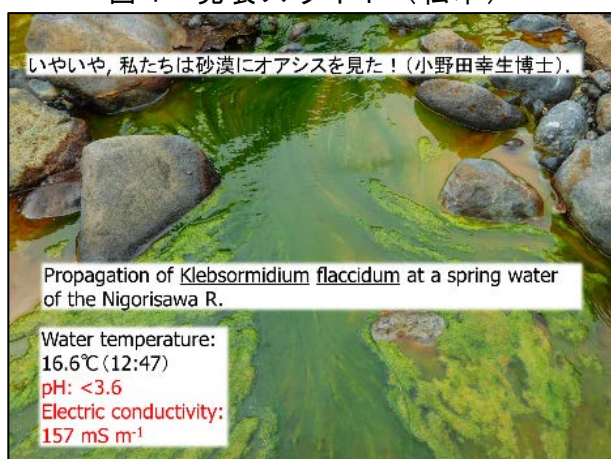


図3 発表スライド（野崎）



図4 発表スライド（田代）

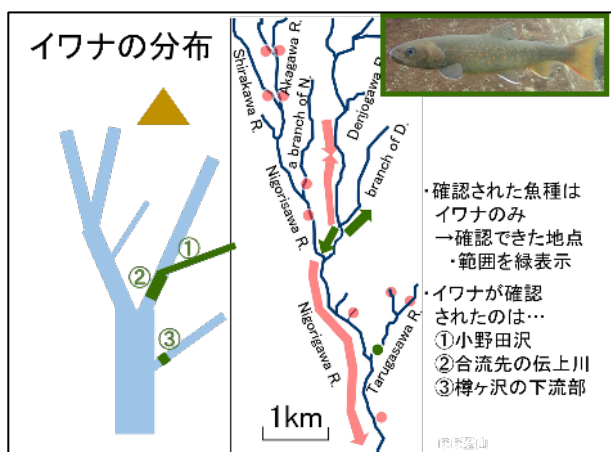


図5 発表スライド（小野田）

その後の総合討議では、田代会員、松本会員のコーディネートのもと、この特殊な陸水生態系の成立および回復の過程についての情報・意見交換に始まり、回復評価に関する判断基準や判断方法などを中心とした活発な議論が交わされました。

その他の自由集会や講演では、グリーンインフラストラクチャー（Green Infrastructure：自然の機能や仕組みを活用した社会資本整備）の話題が多くあり、持続的な社会の形成のためには、生態系サービスの活用が重要であることを強く感じました。御嶽山麓地域では現在もなお、自然災害の影響を色濃く受けながら地産資源を利用した産業活動（水力発電、林業や観光）が行われています。研究グループでは、当該地域の生態系保全や自然共生を意識しながら研究を継続することで、地産資源産業や地域の持続的発展に貢献していきたいと考えています。

今回の応用生態工学会（自由集会）の後の予定として、2019年3月に開催される第53回日本水環境学会年会での口頭発表を行います。また、地元の木曽川漁業協同組合の会合でヤマトイワナについての講演も計画中です。引き続き、御嶽調査研究グループの成果を発表することで、御嶽山麓地域の水環境の現状を周知するとともに、興味をもっていただけるよう努めていきます。

今後も御嶽調査研究は、支部会による社会貢献活動の一環として継続してまいります。会員の皆様にもぜひご参加いただければ幸いです。

第33回 東海陸水談話会の案内

「なぜ日本の川では養殖イワナを放流し続けるのか？ ～持続可能な遊漁資源管理を考える～」

講師：名城大学准教授 谷口義則 先生

日時：2019年1月25日（金） 18時～20時

場所：愛知工業大学
本山キャンパス2階多目的室

<http://www.ait.ac.jp/access/motoyama/>

参加費：無料

主催：日本陸水学会東海支部会

協賛：応用生態工学会名古屋、
ため池の自然研究会

CPD：本講演は、土木学会継続教育（CPD）制度のプログラム（2単位）に認定される予定です。

HP：日本陸水学会東海支部会 HP

<http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/>

→東海陸水談話会

第33回 東海陸水談話会

なぜ日本の川では養殖イワナを放流し続けるのか？
持続可能な遊漁資源管理を考える～

名城大学
谷口 義則 准教授

1995年 山梨県立大学大学院修士課程修了 Master of Science
1998年 北海道大学大学院修士課程修了 修士(環境科学)
1999年 山口県立大学准教授 准教授
2006年 名城大学理工学部教授
専門分野 生態学

2019年
1月25日(金)
18時～20時
愛知工業大学 本山キャンパス2階多目的室
<http://www.ait.ac.jp/access/motoyama/>

参加無料 事前申込不要 会場に直接お越しください

本談話会は、土木学会継続教育（CPD）制度のプログラム（2.0単位）に認定されます。
認定番号：JSCE18-1441 2.0単位

※講演の撮影・録音はご遠慮ください。
※駐車場はありません。必ず公共交通機関をご利用ください。
※お問い合わせ：日本陸水学会東海支部会事務局 事務局
（名古屋大学防災連携センター一階代議室 E-mail: ttsukuro@nagoya-u.jp）
日本陸水学会東海支部会 <http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp>

2018 年度「第 22 回総会・第 21 回研究発表会」の案内

日時 : 2019 年 2 月 16 日 (土) - 17 日 (日) (1 泊 2 日)

場所 : 形原温泉 山田館 (<http://yamadakan.com/>) 愛知県蒲郡市金平町開戸 6

参加費 : 一般 15,000 円、学生 8,500 円、年金受給者 10,000 円

参加〆切 : 2019 年 1 月 18 日 (金)

要旨〆切 : 2019 年 1 月 31 日 (木)

問合せ先 : 日本陸水学会東海支部会 (事業担当) 田代 喬 ttashiro@nagoya-u.jp

支部会サイト : http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/annual_meeting/

◆要旨原稿 :

発表を申し込まれた方は、講演要旨原稿を 1/31 までに以下要領で作成して、提出して下さい。要旨は A4 版 1 ページの word ファイル(様式は陸水学会年会の要旨に準ずる)とします。発表時間は題目数によって変わりますが 15 分前後(発表 10 分, 質疑 5 分)を予定しています。研究成果報告だけでなく、研究提案や相談などの発表でも結構です。年度末のお忙しい最中とは存じますが、ふるってご参加くださいますよう、お願いいたします。

2018年度 日本陸水学会東海支部会総会・研究発表会 参加申込書

1月18日（金）締切

1. 参加者情報：

- ・ 氏 名 _____ (男 ・ 女)
- ・ 所 属 _____
- ・ 参加区分（いずれかに○）
1：一般、 2：学生、 3：年金受給者
- ・ 連絡先
住 所 _____

- 電話番号 _____
- 電子メール _____

2. 参加形態について

- ・ 宿泊・日帰り（いずれかに○）

3. 発表（いずれかに○）： 有 ・ 無 （有の場合は発表演題を記入下さい）

- ・ 発表演題 _____
- ・ 発表者名 _____
- ・ Web公開の可否 _____ 公開を希望しない

※昨年度より講演要旨のweb公開を始めました。公開を希望されない場合は、公開を希望しないに○をつけてください。

4. 来場方法（いずれかに○）

自家用車を利用 ・ 公共交通機関を利用

◆総会・大会申込先（必要事項を記載の上、1/18（金）までにお送り下さい）

日本陸水学会東海支部会（事業担当）

名古屋大学減災連携研究センター 田代 喬

E-mail: ttashiro@nagoya-u.jp

FAX: 052-789-2975

（※メール件名を「陸水学会東海支部会総会申込」として下さい）

日本陸水学会東海支部会 第 21 回研究発表会 講演要旨執筆要領

1. 原稿の形式

- 1) 講演要旨原稿は、MS WORD 形式 (Windows) で作成したファイルを E-mail にてご提出下さい。

締め切りは、1 月 31 日 (木) 必着とさせていただきます。

要旨提出先

日本陸水学会東海支部会 (事業担当)
名古屋大学減災連携研究センター 田代 喬

E-mail: ttashiro@nagoya-u.jp

FAX: 052-789-2975

※メールのタイトルに「東海支部会要旨」と明記してください。
なお、提出後、要旨受領のご連絡をさせていただきます。無い場合
には、提出先アドレスまでお問い合わせください。

- 2) 用紙のサイズは、A4 版に限ります。
3) 原稿枚数は、1 演題につき 1 枚です。
4) 講演要旨集は白黒印刷となります。

2. 要旨原稿の作成方法

- 1) 次ページの執筆例に必ず従って、以下の点に十分に注意して、作成して下さい。
2) 用紙 (A4) は必ず、上 20 mm, 下 25 mm, 左右 20 mm, の余白を取り、その枠内に文書及び図表を収めて下さい。
3) 演題、発表者氏名、所属は、上から 6 行以内にご記入下さい。
4) 演題および演者は、「日本陸水学会東海支部会総会・研究発表会 参加申込書」と同一にして下さい。
5) 連名の場合は、講演者の氏名の左肩に (*) 印を付けて下さい。連名者が多い場合は、所属毎に改行せずに続けてご記入下さい。氏名及び所属に関する文字は、必ず MS 明朝 (10 ポイント) を指定下さい。
6) 演題は、MS ゴシック (13 ポイント) を指定して下さい。
7) 講演番号を記入するため、1~4 行目は左側 40 mm を必ず空白にして下さい。
8) 本文は 2 段組とし、はじめに、材料と方法、結果、考察の項に分け、それぞれの文頭にこれらを小見出しとして明示して下さい。研究内容によりこれらの項目に分け難い場合には、項目の一部省略も可能とします。
9) 小見出し (はじめに、材料と方法、結果、考察等) は、必ず MS ゴシック (10 ポイント) を指定して下さい。
10) 本文の日本語は MS 明朝 (10 ポイント)、英数字は Times New Roman (10 ポイント) を必ず使用して作成して下さい。
11) 図表を載せる場合には、小さな文字や図は避けて下さい (大会事務局や印刷業者では、図表や写真に関しては特別な処理は行いません)。

2019 年度「研究助成」の募集案内

次年度の研究助成の募集を開始しました。水辺環境を対象とした、生物・化学・地学・社会・地理・歴史・環境その他あらゆる探求の取り組みに対して助成を行います。興味のある方は、以下の問合せ先まで問い合わせください。

問合せ先：日本陸水学会東海支部会（研究助成担当）

四日市大学 大八木麻季（oyagi@yokkaichi-u.ac.jp）



アマチュア・若手研究者への調査・研究の奨励

2019年度 日本陸水学会 東海支部会



研究助成募集

小学、中学、高校の部活動などからの応募を優先して採択します

趣旨

日本陸水学会東海支部会では、「水辺環境を対象とした、生物・化学・地学・社会・地理・歴史・環境その他のあらゆる探求の取り組み」に対してアマチュア・若手研究者の調査・研究を奨励するために、以下のような研究助成を行います

助成対象となる調査・研究の分野

陸水環境を対象とした自然科学・人文社会科学・環境教育の実践および教材研究など

募集対象者

アマチュア・若手研究者および研究グループなど

助成金額

申請上限5万円で5件以内の助成を行います

※5万円分の予算まで申請可能ですが、申請内容に応じて減額して支給する場合があります

被助成者の義務

調査・研究は年度内に終了し、その後1年以内に、当支部会研究発表会あるいは、支部会ニュースレター誌上での成果公表をしていただきます

応募方法

以下の項目を含んだ申請書類（A4版、手書き可、当支部会様式使用可）を作成してください

- 1) 研究題目、およびキーワード
 - 2) 申請者（個人の氏名、またはグループ名）と連絡先
 - 3) 調査・研究課題の内容（1000-1200字程度）
 - 4) 助成金の支出予算案（項目ごとに千円単位で）
例：用品費（備品、消耗品）、調査費（成果発表のための学会・研究会参加旅費を含めても構いませんが、調査費以外は申請総額の1/2を超えないようにしてください）、謝金（アルバイト代）など。※謝金については妥当性のないものは認められません
 - 5) 申請代表者の連絡先（電子メール希望の場合はアドレス） 明記のこと
- ※様式は、 <http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/> からダウンロードできます

【注意】

- ・大学、研究機関に所属していない個人・グループ（小中高校の関係者など）を優先します
- ・大学、研究機関に所属する研究者、学生も応募できます
- ・大学（院）生の方は、卒業研究、修士・博士研究の一部内容について申請しても構いません
- ・営利を目的とする調査・研究に対しては助成を行いません
- ・当支部会員でなくても応募できます
- ・応募、採択の機会に、ぜひ当支部会への入会をお願いします

応募締切

5月20日（月）、（郵送の場合は消印有効）。

※下記まで郵送または電子メールでお申し込みください。

■応募・問い合わせ先

日本陸水学会 東海支部会（研究助成担当）

〒512-8512 三重県四日市市萱生町1200

四日市大学 環境情報学部 大八木麻希（宛）

E-mail: oyagi@yokkaichi-u.ac.jp

お知らせ 会費納入について

納入方法として、下記「ゆうちょ銀行」への振込、もしくは談話会や研究発表会などでの直接的なお支払いも受け付けております。ゆうちょ口座から通帳かカードで ATM 振込をご利用いただくと手数料無料となります(ATM 送金料金が無料となるサービス期間は現在も継続中)。会費納入状況が不明な場合は事務局までご照会ください。2 年度分の会費が未納の方は、規約に従い、翌年度には自動的に退会となりますのでご承知おきください。その際も、未納会費 2 年分のお支払いをお願いしております。

納入が確認できた会員のみ、論文集を送付することが総会で承認されています。2017 年度は、論文集が発行されなかったため、2018 年度に合併号が送付されます。「陸の水論文集発行の延期に関するお知らせ」にもありますように、会員数の減少に伴い論文集発行の予算確保も難しい状況となっております。毎年度の送付が滞り大変申し訳ありませんが、会員の皆様にも現状にご理解頂き、確実な会費の納入をお願いいたします。退会をご希望の方は、下記「入会及び大会の手続きについて」を参照のうえ確実な手続きをお願いいたします。

<年会費>

一般 2,000 円、学生（大学生以上）1,000 円、高校生以下は無料、
団体 4,000 円、家族 3,000 円

<ゆうちょ銀行からお振込みの場合>

記号：12120-2 番号：73385891

名前：日本陸水学会東海支部会

<他の金融機関からお振込みの場合>

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：二一八（読み ニイチハチ） 店番：218

預金種目：普通預金 口座番号：7338589

カナ氏名（受取人名）：ニホンリクスイガツカイトウカイシブカイ

（編集後記）

2018 年度もあと 3 か月となりましたが、まだ談話会、研究発表会とイベントは盛りだくさんです。昨年度の研究発表会では、計 30 題、うち学生 20 題もの申し込みがありました。今年度も皆様奮って参加・発表申し込みください。また、学生の皆さんには、最優秀・優秀賞が参加者の投票によって授与されます。昨年度の発表は内容・スライドの見せ方、話し方いずれも非常にレベルが高く、採点が難しかった記憶があります。今年度もどのような研究が聞けるのか今から楽しみです。

（末吉 正尚）